

日韓青少年の自尊感情における比較研究

—— 中学・高校生を対象とした意識調査から ——

小澤 昌之

論文要旨

本稿は日本と韓国の中学・高校生における自尊感情の比較を通して、青少年における自尊感情を支える要因を分析する。先行研究により本稿では、家族や教師、友人との関係のように自尊感情を育む場と、学校生活や将来展望において影響を及ぼすとされる教育達成の観点から、青少年の自尊感情を支える要因を考察する。分析結果によれば、第1に全体的に自尊感情を構成する項目は、日本と韓国の中高校生に共通して高かったものの、身近な人々との充実感や肯定感にかかわる「他者関係性」は韓国より日本の方が高かった。第2に自尊感情を規定する要因に関しては、日韓共通して、家庭生活の良さ等の社会化エージェントに関係する要因が正の影響を有した。各国独自の特徴としては、日本は女子生徒で、かつゲームを長時間操作する生徒ほど自尊感情に負の影響を及ぼす一方、韓国は部活動に加入する生徒ほど、自尊感情に正の影響を及ぼしていたことが判明した。

キーワード【自尊感情、自己肯定感、他者関係性、国際比較、生活意識】

I. 問題設定

一般的に日本の子どもは、他国に比べて自尊感情が低いとされている。ユニセフ・イノチェンティ研究所 (UNICEF Innocenti Research Centre) が OECD 加盟国の 15 歳の青少年を対象に 2007 年に実施した国際比較調査によれば、子どもにおける心理的・社会的側面を測定する「疎外感」の項目に関して、全体的に各国の当該項目の肯定率は、平均して 5～10%に留まるのに対し、日本の場合は、「気おくれして居心地が悪い」の肯定率は約 18%、「孤独を感じる」の肯定率は約 30%と、それぞれの項目で各国平均の約 3 倍に達した¹⁾。また、日本・アメリカ・中国・韓国の 4ヶ国の高中生を対象に行った意識調査 (日本青少年研究所 2011) によれば、「私は価値のある人間だと思う」「私は自分を肯定的に評価する方だ」などの自尊感情に関係する項目は、アメリカ・中国は肯定率が高いのに対し、日本は 4ヶ国中最も肯定率が低かった。これらの国際比較調査を比較すると、日本の中高校生における自尊感情の低さは際立っているといえる²⁾。

そこで本稿では、近代化以降における学歴社会の成立や第1次産業から第3次産業へと移行した産業発展過程などのように、東アジア諸国の中で共通した特徴を多く持ち合わせてい

る日本と韓国の中学・高校生における自尊感情の比較を通して、両国の青少年における自尊感情を支える要因やその相違点を分析する。自尊感情に大きな影響を及ぼすとされる両国の中高生の学校生活に注目してみると、両国では学業や学校に対する見方が異なる。韓国の学校は中学から高校へと上がるにつれて、大学入試に向け学業に特化した体制へ進行する。一方日本の学校は、個性化教育と少子化による受験競争の緩和を受け、学業に専念するよりも、学校の中と外との境界を曖昧にすることで学校適応を図ることを優先するとされる（藤田・熊谷 2002）。本稿では日韓両国の自尊感情に関する意識の相違点や、身近な人々における関わり合いなど青少年の自尊感情を支える要因について注目する。

II. 先行研究の検討

1. 自尊感情に関する先行研究

本節では、自尊感情に関する先行研究から、児童生徒がどの要因から自尊感情の影響を受けるのかについて考察を進める。これまで欧米での先行研究では、自尊感情を自己と他者との相互作用による自己の評価的行動につなげる研究が進められてきた³⁾。日本における自尊感情の先行研究は、自尊感情の形成過程と、学校生活や家族、教師などのように、社会化のエージェント（担い手）との関連性を分析した研究が蓄積されている。

青少年の自尊感情に関する先行研究によれば、柏木（1983）は、自己概念についての他者評価と自己評価の結果により構成される自尊感情は、学業達成と正の相関にあり、自尊感情得点が高い者ほど高等教育機関への進学が促進されることを指摘した。また自尊感情は、青少年の規範意識、いじめや不登校・校内暴力等の問題行動の発生過程にも関連するとされる。蘭（1992）によれば、自尊感情を高めるには、子どもの学級内における役割を高めること（社会的適応行動）や、成功体験から生まれる自信と友達からの受容・容認による安定感の獲得（建設的行動）が必要だとしている。実際に、自尊感情が高いほど対人関係が円滑となるとともに、学校行事やホームルーム活動にも活発に参加する傾向が表れており、学校に対する適応度や満足度が自尊感情の高さに寄与するとする知見も存在する（吉川・高橋 2006、新井・古河・浅川 2007、松下・石津・下田 2011、都・野島 2006）。

学校以外の場面では、家族との会話が長く、家庭内で情緒的に安定している生徒ほど自尊感情が高く、生徒は家族を最も重要だと認識するとされる（長津 2001、趙・松本・木村 2011）。そして社会との関係では、自尊感情、自己有用性や共感性等の高さと、誘惑への抵抗の程度が、規範意識の向上に関与する要因であることも判明している（臼井・橘川 2007、葛西・長尾 2004）。さらに親の養育態度を中心に自尊感情を育む環境を分析した伊藤（2001）によれば、自尊感情が高い生徒ほど、両親との仲が良好で、父親への信頼感が高くなるとされている。したがって、自尊感情は他者評価を踏まえた自己評価であること、そし

て自尊感情の形成は子ども自身の肯定感や評価だけでなく、周囲の生活環境や身近な他者との関わり合い（他者関係性）で変動する可能性を有すると考えられる。

青少年の自尊感情には、自尊感情は青少年の教育達成や問題行動の発生に影響を及ぼすが、自尊感情を育む場としては、学校での生活や教師・友人との相互関係（社会的側面）、家庭での生活環境（家族的側面）が大きな影響を有することが判明している。したがって自尊感情を育む場所としては、生徒の生活時間に占める比重が大きい学校生活だけでなく、教師・友人との関係、家庭生活、そして自尊感情と密接に関連するとされる規範意識といった社会化のエージェントが影響を及ぼす要因であると考えられる。

2. 日本と韓国における青少年の学校生活に関する先行研究

本節では、日韓中高生の学校生活とその取り巻く人間関係の相互作用を分析するに当たり、中高生の学校生活と関連する先行研究を考察する。最初に日本の中高生の学校生活に関する研究としては、1970年代以降の高校進学者の急増を受け、高校生の学校適応を進路選択や教育達成の面から分析した「生徒文化の分化」（耳塚 1980）が挙げられる。

「生徒文化の分化」とは、学業成績や学校へのコミットメント状況に応じて所属する学校文化が形成されるというもので、「向学校＝学校適応（高学力）」「反学校＝逸脱志向（低学力）」を前提としている。「生徒文化の分化」は地位欲求不満説⁴⁾を進路意識の形成の視点から実証した理論であり、輪切り選抜に基づく「学校格差体制」の下で、学校にいる間から所属する学校文化によって、若者を社会的地位へ配分・選抜する機能を有している。

しかし1990年代以降、少子化の影響で受験競争の緩和が進んだ上、1990年代以降の学校は個性化教育の潮流の中で、「居心地の良い学校」を目指す「学校のコンサマトリー化」（伊藤 2002）が図られたことにより、逸脱志向の動機づけが形骸化した。また1990年代以前の教師タイプは、生徒集団に規範を「外」から教え込み、そこからの逸脱を統制する強力な「社会化エージェント」であったのに対し、1990年代以降の教師タイプは、明確な学校的規範を提示せず、むしろ生徒個々人の「支援者」の役割を果たすとされる（金子 2000）。

近年の先行研究では、高校での相談ネットワークを分析した工藤（2010）は、家族に相談する生徒ほど高校生活に適応的となるものの、「関係の強い他人（友人）」に相談する生徒ほど、従来の職業生活観を有する傾向にあると指摘した。また日本における中高生の学校適応については、学校・教師に対する普段の行動や社会階層等の家庭的背景（古田 2012）、学級内での友人関係に対する満足感（松下・石津・下田 2011）が関与するとされている。

韓国の中高生における学校生活をめぐる研究に関しては、日本における日韓比較調査を中心に先行研究が蓄積しており、1990年代からは学校生活と学歴・社会階層などの社会経済的地位との関連性をもとにした分析が進んだ。韓国の高校入試に関しては、1970年代に始まった「高標準化」⁵⁾政策の弊害として発生した生徒間の学力格差に対応するため、1980

年代に才能ある生徒に能力と適性に合った教育を行う科学高校が開校されてから、1990年代半ばには受験名門校のイメージが定着し、学校側は授業内容の受験シフト⁶⁾を強めた(石川2005)。近年の韓国の学校生活における先行研究を整理すると、金(2007)は、競争社会にある韓国では、望み通りの大学への進学実現が優先されるため、親や教師、友人に対する充実感や満足度が、勉強態度や学校生活に対するコミットメントを促す要因であることを指摘した。また熊谷(2008)によれば、韓国では大学入試に対するアウトプットが重視されるため、学校タイプに関係なく、どの生徒も学習のために学校にコミットせざるをえない状況にあるものの、実際には学力よりも入学後の学校と生徒との適性(第1志望の高校に進学できたかどうか)が進学アスピレーションに影響を与える可能性があるとする。

日韓の中学・高校生の比較調査を行った藤田・熊谷(2002)は、学校適応の促進する志向に関しては、日韓で学業成績が影響を及ぼすことは共通していると指摘した。韓国では出身階層が、生徒の学校適応を促す効果が見られたものの、日本では教育外活動に参加する生徒ほど、学校適応が促される傾向が見受けられた。生活時間に学業の占める比重が高まる高校生になると、韓国の生徒は学校を学業に特化した場所だとして捉え、学校外の生活は消費文化やユースカルチャーにコミットする切り替え志向が日本より強まるという。また学習時間の分析を行った藤田・渡辺(2002)によれば、家庭での学習量は中学校では日韓ともに差はなかったものの、高校生の場合は韓国の生徒の方が日本の生徒よりも大幅に多く、大学受験競争の過熱ぶりが反映されていた。学習時間に関しては、日本では階層要因が影響を及ぼしていないのに対し、韓国では出身階層が家庭の学習時間に影響を及ぼしており、家庭での親の教育態度に起因することも言及されていた。

これまでの研究を整理すると、日本の青少年の学校生活に関する研究では、教師は生徒の主体的選択を重視する故に、評価者であること以上に、生徒の選択を助ける支援者としての意味合いが強くなり、微妙な地位に置かれていると思われる(大多和2008)。韓国の青少年の学校生活に関する研究では、韓国の中高校生における受験競争の過熱化に対応する形で、学業へのコミットメントは日本より高いことから、学校適応の高さは学業-地位達成に関連する戦略の一つとして取られている(藤田・熊谷2002)。学校外では消費空間やインターネットへのコミット、友人とのコミュニケーション⁷⁾を通じてストレスを発散するなど、場面に応じて生活スタイルを切り替える流れが形成されると考えられる。

3. 本稿における研究課題

本節では日韓両国の中高生における自尊感情に関する議論を受け、日本と韓国の中高生の違いを確認した後に、自尊感情を支える要因を検討する。日本青少年研究所(2011)の調査によれば、自尊感情に関係する項目の肯定率は、韓国は約70%なのに対し日本は約30%と大きな開きがあった。ただ、自尊感情の要素を先行研究に即して検討すると、日本人が自己

否定的な行動をとる傾向は、社会的に望ましいとされる規範に従っているからであり、その結果日本人の自尊感情は状況により変化し、自尊感情は韓国よりも他者規定的となるという考え方もあり得る。実際に韓国人は他者に対し自己を否定する行動があまり見られないことから、自身の抱く自己肯定感の高さは、自尊感情の安定につながるという知見も存在する(趙・松本・木村 2011)。したがって自尊感情の相違点に関しては、自尊感情の高さよりも、自己か他者かといった自尊感情の形成過程の違いに注目すべきであると考えられる。

青少年の自尊感情における規定要因に関する先行研究によれば、自尊感情は青少年の教育達成(柏木 1982)や問題行動の発生(蘭 1992)に影響を及ぼすとされていた。そして自尊感情を育む場としては、生徒の生活時間に占める比重が大きい学校生活(吉川・高橋 2006、新井・古河・浅川 2007)だけでなく、教師・友人との関係、家庭生活(長津 2001、趙・松本・木村 2011、蘭 1992)、そして自尊感情と密接に関連するとされる規範意識(臼井・橋川 2007、葛西・長尾 2004)といった社会化のエージェントが影響を及ぼす要因と考えられる。そこで本稿では次の2点を焦点に分析を行う。第1に、日韓両国の自尊感情に関する意識の相違点に注目する。第2に日韓中高生において、学校での生活や、教師・友人との関係のように自尊感情を育む場と、学校生活や将来展望において影響を及ぼすとされる教育達成の観点から、青少年の自尊感情を支える要因を考察する。

Ⅲ. 分析方法と対象

使用するデータは2009年11月～2010年3月に慶應義塾大学グローバルCOE「市民社会におけるガバナンスの教育研究拠点」と慶應義塾大学YES研究会、韓国青少年政策研究院(NYPI)が日本と韓国で実施した「第2回青少年の生活についての調査」(研究代表者:慶應義塾大学文学部教授 渡辺秀樹(当時))である。日本・韓国とも共通して、無作為に抽出した中学2年～高校2年生の生徒(有効回答数:日本711人、韓国771人)を対象に行われ、地点ごとにサンプルを選定して質問紙を配付・回収する訪問留置法により実施された。

日本の調査は、東京都の住民基本台帳より無作為抽出し、都内の市区町村の人口規模を基準にして3層(23区と大都市、中小都市・町村)に分けた。韓国の調査は、韓国統計局の人口統計(2008年12月31日現在)に基づいて、ソウル特別市行政区の人口規模に比例した割当を算出した後に、行政区および性別・学年による割当を設定し、行政区内の調査地点を無作為に抽出した。なお調査に当たっては、専門調査機関に委託したうえで調査を実施している。筆者は慶應義塾大学YES研究会の研究メンバーとして所属しており、調査票の作成・整理から、実査後のデータ集計・クリーニング処理に至るまで、調査過程の細部にわたって主要な役割を果たしている。

IV. 調査分析の結果

1. 日韓中高生の自尊感情

本節では日本と韓国の中学・高校生に関する自尊感情に関する意識の相違点を分析する。具体的に自尊感情に関する意識の相違点を検討するため、日本と韓国の間で自尊感情に関する項目のクロス集計を行った。表1の分析結果によれば、「主体的に過ごす」(F)を除いて日本と韓国で有意差を示したが、Fのみ有意差が見られない要因としては、対象となった中高生は、現状の生活に満足していることを間接的に示したと考えられる。まず「友人の意見尊重」(A)や「周囲の人々への感謝」(C)のように、身近な人々との充実感や肯定感に関わる項目(A～C)は、韓国より日本の中高生の方が肯定する割合が多いものの、「自己信頼」(D)のように、自身の評価にかかわる項目(D～F)に関しては、Fを除き日本より韓国

表1 自尊感情に関する項目 (χ^2 検定)

		1	2	3	4	合計	検定
A 友達の考え方や行動を認めている	日本	9(1.3)	55(7.7)	445(62.7)	201(28.3)	710	***
	韓国	23(3.0)	107(14.0)	502(65.4)	135(17.6)	767	
B 先生や友達がいる学校生活が充実している	日本	22(3.1)	74(10.4)	321(45.2)	293(41.3)	710	***
	韓国	30(3.9)	175(22.8)	455(59.2)	108(14.1)	768	
C 周りに支えられていることに感謝している	日本	12(1.7)	53(7.5)	279(39.2)	367(51.6)	711	***
	韓国	22(2.9)	133(17.3)	471(61.2)	143(18.6)	769	
D 自分の判断が信頼できる	日本	44(6.2)	246(34.6)	318(44.7)	103(14.5)	711	***
	韓国	17(2.2)	170(22.1)	451(58.7)	130(16.9)	768	
E 自分で問題を解決できると信じている	日本	39(5.5)	249(35.0)	303(42.6)	120(16.9)	711	***
	韓国	22(2.9)	181(23.5)	444(57.7)	122(15.9)	769	
F 人生を主体的に過ごしている	日本	31(4.4)	198(28.0)	358(50.6)	120(17.0)	707	
	韓国	31(4.0)	183(23.8)	427(55.5)	128(16.6)	769	
G 時々自分を不要な人間だと思う	日本	164(23.1)	246(34.7)	204(28.8)	95(13.4)	709	***
	韓国	163(21.2)	324(42.2)	235(30.6)	46(6.0)	768	
H 時々自分を悪い人間だと思う	日本	113(15.9)	222(31.2)	279(39.2)	97(13.6)	711	***
	韓国	151(19.6)	319(41.5)	247(32.1)	52(6.8)	769	
I 自分を失敗した人間だと思う方だ	日本	176(24.8)	287(40.4)	179(25.2)	69(9.7)	711	***
	韓国	261(33.9)	284(36.9)	179(23.3)	45(5.9)	769	

註) ①回答項目の説明は以下のとおり。1: まったくそうではない。2: どちらかといえばそうではない。3: どちらかといえばそうである。4: まったくそうである。②数字は人数、カッコ内は%を指す。③検定: *** p < 0.001。

表2 自尊感情項目の主成分分析（バリマックス法）

	自己肯定感	自己評価	他者関係性
G時々自分を不要な人間だと思う（反転）	.859	.159	.038
I自分を失敗した人間だと思う方だ（反転）	.842	.148	.082
H時々自分を悪い人間だと思う（反転）	.836	.026	-.058
E自分で問題を解決できると信じている	.092	.863	.257
D自分の判断が信頼できる	.158	.794	.231
F人生を主体的に過ごしている	.066	.777	.313
B先生や友達がいる学校生活が充実している	.065	.228	.826
C周りに支えられていることに感謝している	-.019	.230	.821
A友達の考え方や行動を認めている	.009	.342	.736
固有値	2.706	2.080	1.282
寄与率（%）	30.069	23.116	14.249
信頼性尺度（Cronbach's α ）	.711	.744	.801

表3 日韓中高生の性別と自尊感情尺度の平均値比較（t検定）

	日本男子	韓国男子	検定	日本女子	韓国女子	検定
他者関係性	9.66	8.68	64.714***	10.04	8.87	101.507***
自己評価	8.20	8.71	14.128***	8.17	8.52	7.051**
自己肯定感	8.17	8.45	2.895+	7.75	8.60	24.125***

注）検定：*** $p < 0.001$ 、** $p < 0.01$ 、* $p < 0.05$ 、+ $p < 0.1$ 。t検定で平均値の高い項目を傍線にて示した。

の中高生のほうが肯定する割合が多い。また「自身の失敗の認知」(I)のように、自身の肯定感や自己決定にかかわる項目(G～I)において、韓国より日本の中高生のほうが否定する割合が多い点は、先行調査(UNICEF Innocenti Research Centre 2007 = 2010、日本青少年研究所 2011 など)の知見と一致した。

続いて自尊感情に関する項目の特徴や、日本と韓国の中高生に関する自尊感情の相違点を詳細に把握するため、表1の自尊感情に関する項目に関して、主成分分析にかけた(表2:自身の肯定感や自己決定にかかわる項目のみ(A～C)反転)。その結果、固有値が1を超える項目が項目ごとに3つ抽出されたため、項目の特性をもとに、回答者自身の肯定感や信頼感に関わる項目合計3項目を「自己肯定感」、自身の評価や効力感に関わる項目合計3項目を「自己評価」、身近な人々との充実感・信頼感にかかわる項目合計3項目を「他者関係性」と名づけた⁸⁾。自尊感情尺度の一貫性を調べるため信頼性分析にかけたところ、各尺度とも一定の水準を超えたことから、尺度としての一貫性が担保されと考えられる。

次に表2で現れた日本と韓国の中高生における自尊感情尺度の違いを詳細に検討するた

表 4 分析に用いた変数の記述統計量

	日 本		韓 国	
	平均	標準偏差	平均	標準偏差
女子ダミー	0.47	.500	0.47	.500
学 年	2.53	1.116	2.51	1.120
部活動有無	0.99	.092	0.41	.492
学校適応尺度	18.39	3.252	15.87	3.520
家庭生活尺度	34.79	6.951	35.23	6.338
教師関係尺度	26.30	7.264	25.60	7.050
規範意識尺度	16.36	2.832	13.69	2.477
友人関係尺度	33.87	6.333	35.11	5.480
成 績	3.10	1.103	3.20	1.152
教育アスピレーション	15.51	1.436	16.12	1.430
学習塾通学ダミー	0.40	.490	0.51	.500
学習時間_平日 (分)	86.81	89.667	210.49	154.141
学習時間_休日 (分)	97.76	110.711	193.23	174.177
ゲーム利用時間 (分)	58.96	96.096	56.86	107.934
ネット利用時間 (分)	50.38	69.099	106.89	100.427
携帯電話操作時間 (分)	76.98	125.179	131.92	217.466

め、自尊感情の3尺度と男女の性別で平均値の変化を検討した。性別の比較を行ったところ(表3:数値に付された下線は日韓で高い平均値の項目を示す)、総じて男子・女子生徒ともに、「他者関係性」は日本より韓国の方が平均値は高く、「自己評価」「自己肯定感」に関しては韓国より日本の方が高くなっていった。自尊感情の各尺度の日韓別変化を詳細にみると、平均値が最も高い属性は「他者関係性」は日本・女子、「自己評価」は韓国・男子、「自己肯定感」は韓国・女子となった。平均値が最も低い属性は、「他者関係性」は韓国・男子、「自己評価」「自己肯定感」はいずれも日本・女子となった。

分析結果から推察すると、日本の中高生の場合は、友人や家族などのように他者との関係を重視するものの、自身の評価や肯定感は韓国と比べて低いことから、自尊感情は他者との関係性に準拠して形成されていくと見られる。韓国の中高生は男女ともに、成績や最終学歴を重視する学歴主義が広く浸透しているせいか、他者との関係の充実を優先するよりも、自身の評価や肯定感を高めることで自尊感情を形成していくと考えられる。

表5 自尊感情の規定要因

	他者関係性		自己肯定感		自己評価	
	日本	韓国	日本	韓国	日本	韓国
女子ダミー	-.074*	.013	-.121**	-.071+	-.194***	.014
学 年	-.012	.001	-.008	.062	-.070+	-.046
部活動有無	-.002	.069*	-.080*	.102**	.024	.088*
学校適応尺度	.184***	.248***	.058	.148**	.028	.047
家庭生活尺度	.137***	.171***	.097*	.162***	.068	.114**
教師関係尺度	.189***	.116**	.159**	-.048	.060	-.092*
規範意識尺度	.091*	.130***	-.016	.088*	.064	-.067+
友人関係尺度	.295***	.191***	.103*	.120**	.146**	.019
成 績	-.049	-.006	.103*	.107**	.131**	-.012
教育アスピレーション	.049	-.002	.006	-.014	-.086+	.059
学習塾通学ダミー	-.036	.026	-.020	-.003	-.065	-.016
学習時間_平日	.001	.032	-.047	.089*	-.017	.022
学習時間_休日	-.019	-.050	.034	-.063	.037	.025
ゲーム利用時間	-.139***	.004	-.120**	.026	-.152***	-.068
ネット利用時間	.000	.051	-.003	.016	-.077+	-.058
携帯電話操作時間	-.006	.013	.060	-.057	-.050	-.029
F 値	20.506***	15.809***	5.842***	7.467***	5.478***	2.447**
R ² 決定係数	.375	.275	.146	.152	.138	.055

註) ①数値は標準偏回帰係数 (β)。②検定は以下のとおり。*** $p < 0.001$ 、** $p < 0.01$ 、* $p < 0.05$ 、+ $p < 0.1$ 。

2. 日韓中高生の自尊感情を支える要因

これまで日本と韓国の中学・高校生における生活意識と自尊感情に関する特徴を見てきたところで、次に自尊感情の形成に寄与すると考えられる3つの尺度（「他者関係性」「自己肯定感」「自己評価」）の尺度得点をもとに、自尊感情の形成に関連する項目との間で表5の通り重回帰分析にかけた。分析に関しては、先行研究と研究課題における議論をもとに、自尊感情の各尺度を従属変数、独立変数には次の3種類の変数を投入した。第1に性別や学年、部活動の所属などを含めた本人の属性に関わる項目。第2に学業成績や教育アスピレーションのような教育達成項目⁹⁾。第3に教師や学校、家庭などの社会化に関わる項目、学習時間やテレビの視聴、ゲームの利用時間のよう、中高生にとって身近な日常生活の時間配分に関わる項目¹⁰⁾である。なお、部活動の所属と性別については、「ない」「男性」と回答した者には0、「ある」「女性」に1を与えてダミー変数を構成した。なお記述統計量は表4のとおりである。

分析結果を詳細に検討すると、韓国より日本の方が肯定率の高かった「他者関係性」を従属変数に投入した分析結果によれば、「他者関係性」には、日韓共通して、学校生活での適応や家庭生活の良さ、教師・友人関係の充実度や社会的ルールの順守といった、社会化のエージェントに関わる項目が正の影響を及ぼしていた。また、日本のみ女子ダミーとゲーム利用時間が負の影響を及ぼしていたことから、日本の場合は男子であるほど、ゲームでよく遊ぶ中高生ほど、他者との関係を築くのが苦手となる傾向にある。社会化のエージェントとの関係が正の影響を示した結果に関しては、自尊感情関連の先行研究における知見のとおりであり、友人や教師、家族のように身近な他者との関係がうまく築ける生徒ほど、自尊感情が高まる傾向は日本と韓国の中高生においては共通していると考えられる。

次に日本より韓国の方が肯定率の高かった「自己肯定感」を従属変数に投入した分析結果によれば、「他者関係性」における分析結果とは異なり、日本と韓国で異なる特徴を有している。第1に日韓共通して家庭生活の良好さ、友人との関係の良さのように、社会化のエージェントに関わる項目が正の影響を有している。第2に日本のみ、教師との関係充実度が正の影響を持つうえに、女子ダミーとゲーム利用時間が負の影響をもつことから、日本の中高生の場合は、教師と良好な関係を維持するほど自己肯定感が高くなるものの、男子でかつゲームでよく遊ぶ中高生ほど、自分自身の意思決定を迷いがちになると考えられる。第3に韓国のみ、部活動の所属や社会的ルールの順守、平日の学習時間が正の影響を有することから、韓国の中高生の場合は、部活動に所属し、平日にそつなく勉強時間を確保し、規範意識の高い生徒ほど自己肯定感が高い傾向にあると考えられる。第4に教育達成項目では、日韓の中高生とも学業成績が正の影響を示したことから、成績の高い生徒ほど、自己肯定感の側面で自尊感情が高い傾向にある。

なお、韓国のみ「自己肯定感」尺度と学習時間の長さの間に正の影響が表れた要因としては、先行研究(藤田・熊谷2002、藤田・渡辺2002)のとおり、日本より韓国の中高生の方が学習時間は長い上、成績やテストの準備を日頃から怠りなく進めることが、教育達成に直接関係するものとして重視されていることが影響すると考えられる。また、部活動の所属に関しては、部活動に所属する生徒は日本より韓国の方が少ないため¹¹⁾、部活動と学業との両立する生徒ほど自己肯定感が高いと思われる。

最後に日本より韓国の方が肯定率の高かった「自己評価」を従属変数に投入した分析結果に関しては、「自己肯定感」の結果と同じく日本と韓国で異なる特徴を有していた。第1に日本の中高生の場合は、友人関係の充実度が正の影響を有するものの、女子ダミーとゲーム・インターネット利用時間が負の影響をもつことから、日本の中高生は、友人との関係が充実しているほど自分自身の評価が高い。第2に女子生徒であるほど、そしてゲームでよく遊んだり、インターネットをよく利用したりする室内での活動を重視する中高生ほど、自己評価が低い傾向にあると思われる。第3に韓国の中高生の場合は、部活動の所属の有無と家

庭生活の良好さが正の影響をもつことから、韓国の中高生は、部活動に所属し、家族と良好な関係を維持するほど自己評価が高い傾向にあると考えられる。第4に教育達成項目では、日本の中高生は学業成績が正の影響を及ぼしていたものの、韓国の中高生はどの項目とも有意な影響が見られなかった。

日本のみ「自己評価」において学業成績が有意な影響を及ぼしていたのは、日本の中高生は自己価値の随伴性（個人が特定の領域（成績）を重要視している程度）が働き、テストで良い成績を取ることが動機づけとなって自己評価が高まることが関係すると見られる（大谷・中谷 2013）。一方韓国の中高生の場合は、日本と同様、国際比較調査では学力が高い水準にあるが、学習そのものに対する興味関心が低い傾向にあるため（熊谷 2008）、成績と「自己評価」の間に関連性が見られなかったと考えられる。

日本の中高生に関して、ゲーム・インターネット利用時間が「自己評価」尺度に負の影響を及ぼす要因としては、インターネットやゲームは身近な他者との関係と接触する必要がないため、利用時間が長いほど身近な他者との付き合いが苦手になった結果として、自己評価が低くなる可能性が考えられる。また、日韓共通して「自己評価」尺度と社会化エージェントに関係する項目との関連性が低い要因としては、自己評価は個人間で醸成される感情であり、自分の他者との付き合い方で変化することが挙げられる。自己評価自体が大きいか小さいかは個人的評価、つまり本人の主観に委ねられるため、社会化の担い手となる身近な他者からの影響が受けにくいと思われる（松下・石津・下田 2011）。

V. 結論と考察

1. 本稿の結論

本稿では、日韓の中学・高校生における生活環境の違いと自尊感情を規定する要因について分析してきたが、知見としては次の通りである。日本と韓国の中学・高校生に関する自尊感情に関する意識の相違点とその規定要因に関しては、第1に全体的に自尊感情を構成する項目は、日本と韓国の中高生に共通して肯定率が高かったものの、身近な人々との充実感や肯定感にかかわる「他者関係性」は韓国より日本の方が高い。また自分自身の評価や信頼にかかわる「自己評価」、自身の肯定感や自己決定にかかわる「自己肯定感」に関しては日本より韓国の方が高い傾向を示した。第2に自尊感情を規定する要因に関しては、「他者関係性」尺度は、日韓共通して、学校生活での適応や家庭生活の良さ、教師・友人関係の充実度や社会的ルールの順守といった、社会化のエージェントに関係する要因が正の影響を有した。しかし重回帰分析が「自己肯定感」→「自己評価」へと経るに従って、友人や学校生活といった社会化のエージェントにかかわる要因の影響度が逡減していった。

日本の青少年の自尊感情に関して検討すると、学校生活など社会化エージェントに関係す

る要因の影響度が、「他者関係性」尺度において最も強くなっていることが確認された。日本の青少年において「他者関係性」尺度による影響が大きい背景としては、「居心地の良い」学校を進め、生徒本人の個性や考え方を重視しようとする「学校のコンサマトリー化」の浸透(伊藤2002、藤田・熊谷2002)とともに、学業成績に基づく業績主義的競争を勝ち抜こうとする予期的社会化モデルは成立しにくくなっていることが考えられる(大多和2000、堀2000)。また学校生活の先行研究との比較では、「自己評価」尺度を除き、学校・教師に対する普段の行動(古田2012)や友人関係に対する満足感(松下・石津・下田2011)など、先行研究において指摘された知見についても、自尊感情の形成において影響を示すことが確認された。したがって、日本の青少年にとっては、身近な他者と日常生活の中で、どのように関係を維持していくのが重要だと考えられる(趙・松本・木村2011)。

韓国の青少年の場合は、社会化エージェントに関係する要因に関しては、「他者関係性」尺度と「自己評価」尺度には一定の影響を及ぼしていた。韓国の中高生は受験競争や学業に対する優先順位が高く、親や友人、教師などの身近な他者との関係や、自己評価を高めようとする意識が自尊感情の高さに関連して、生徒本人の熾烈な受験競争を下支えすると思われる。その背景には、身近な他者との関係の充実感や自己評価を高めるために、学校外の生活状況(インターネットによるコミュニケーション等)が寄与していると考えられる(馬居他2005、都・野島2006)。

ただ、先行研究で指摘された項目のうち、親や教師、友人に対する充実感(金2007)については知見と一致したものの、教育アスピレーション(熊谷2008)は日本と同様に韓国の青少年に有意な影響を及ぼさなかった。韓国は日本と同様に国際学力比較調査において高水準にあるにもかかわらず、一部の項目を除き、成績や教育アスピレーションといった教育達成変数と自尊感情項目との間に関連性が見られなかったのは、生徒による韓国の教育制度に対する不満や学習に対する興味関心の低さ(熊谷2008)が影響していると考えられる。

2. 本稿の知見と今後の課題

日本と韓国の中高生における自尊感情の規定要因を通じた分析において、本稿の知見としては次の3点が挙げられる。1点目は日本の中高生の場合は、女子生徒であるほど自尊感情が低くなる傾向にあることである。中高生を対象とした調査において、自尊感情の性差に着目した研究は乏しいものの、大学生の関係性動機の観点から分析した佐久間・無藤(2003)の知見と一致したことは着目すべきだろう。その背景には、自尊感情の低い人は自分に自信がなく、感情の表出にためらいがあること(佐久間・無藤2003)や、1990年代以降の「個性重視」を標榜する教育改革の進行に伴い、教師も「自尊感情の低い」生徒の個性を認めるようになったこと(大多和2008)も影響したと考えられる。

2点目は日本の中高生は、ゲームでよく遊ぶ中高生ほど、自尊感情が低くなる傾向にある

ことである。日本の児童生徒を対象に質問紙調査を行った戸部・竹内・堀田（2010）によると、ゲームを長時間操作する依存度の高い児童生徒ほど、「親には何でも話せる」など心理・社会的変数が望ましくない傾向を示した。ゲームの利用時間の間に負の影響が見られた本稿の知見は、結果的にゲームの過度な利用が生徒の社会的不適応に寄与する可能性を示唆したことから、今後は追加調査により関連要因を含めて精査を行う必要があると考えられる。

3点目は韓国の中高生の場合は部活動に所属している生徒ほど、自己肯定感や自己評価が高い傾向にあることである。韓国の高校生に質問紙調査を行った黄ほか（1998）によれば、競技選手を目指す代表運動部群ほど部活動の継続が学業や進路にマイナスの影響を及ぼすとされた。しかし本稿の知見は先行研究の知見とは異なり、部活動参加による自尊感情の形成に影響していたことから、他の意識項目（社会化関連要因など）との関連により部活動の参加がプラスに働くと考えられる。今後は日韓中高生のライフスタイルを考慮した上で、「自己評価」「自己肯定感」尺度の形成過程に焦点を当て、青少年の日常生活と自己評価や自己肯定感を培う意義の関連性について考察する。

付記

本研究は、日本学術振興会科学研究費補助金（基盤研究（B）：研究課題番号 20330108 および 26285122）の助成による研究成果の一部である。

註

- 1) ユニセフ・イノチェンティ研究所の国際比較調査報告書（2007）を翻訳した国立教育政策研究所（2010）の本文箇所（図 6.3b）では、「学校ではよそ者だ（またはのけ者にされている）と感じている」「学校は気おくれがして居心地が悪い」「学校はいつも退屈だ」となっている。しかしながら報告書の原典（2007）の当該箇所（図 6.3b）は、「I feel like an outsider or left out of things」「I feel awkward and out of place」「I feel lonely」と、質問箇所のうち「学校」が欠落している。国立教育政策研究所報告書（2010）において「学校の中の事象」として意識したのは、直前の節に学校に関する質問があったことに影響を受けたと思われるが、本稿では原典に沿って、社会事象全体における疎外感の事柄として取り扱うこととする。
- 2) 日本青少年研究所（2011）の調査によると、高校生の自己評価の肯定率がアメリカ・中国・韓国に比べ、日本の高校生の割合が低い要因としては、将来への不安から目標や夢を持ちづらいこと、インターネットの発展に伴い、自分が生きているリアリティーが狭く限定的となることも、高校生の自信喪失に影響していると分析している。
- 3) 例えば、社会に所属しているという感覚を経験できなかった子どもは、劣等感や自分の価値が低いという感情を抱き、非適応的で破壊的な行動を示す可能性が高いとされる（Dreikurs 1972, Glasser 1969）。またアンダーソンら（1991=1999）によれば、自尊感情の低さと今日の若者が起こしている深刻な問題との間には相関があるものの、子どもたちの自尊感情を育てることでこの問題を解決できるとされている。
- 4) 地位欲求不満説とは、学校ランクや成績が下位に属する生徒が、逸脱行動や学校不適応を起こ

しやすい現象を学校生活により説明する理論である。特徴は、①成績や学校ランク、成績志望など将来的な報酬のアクセス可能性に応じ欲求不満が形成される、②欲求不満を通して、進学へのアスピレーションが低下する、の2つが挙げられる。

- 5) 「平準化」政策とは1974年に導入され、熾烈な受験競争を抑制するため、一般系高校の一切の競争入試の廃止と、抽選による各学校への入学者配定を柱とする制度である。「平準化」の適用地域は、地域内をいくつかの学群に分けられ、一般系高校への志願者は居住地によって自動的に決まる所属学群に対して志願し、各市や道が実施する連合考査に基づいて、合格者を学群内の公立・私立を問わず機械的に配定される。「平準化」制度は、2003年の時点で、ソウル特別市をはじめとする23の地域で実施されており、一般系高校の56.3%、高校生の71.9%がその適用を受けている(石川2005)。

なお「平準化」政策が導入される1974年より以前は、大学進学に有利な一般系高校(日本の普通科高校に相当)に進学する生徒が急激に増加し、一般系高校の進学を巡って熾烈な受験競争が繰り広げられ、学卒後に主として就職する生徒が多い実業系高校(日本の職業学科高校に相当)との学校間格差が教育問題となっていた。高校平準化は、受験競争の抑制という観点から、これらの課題を解決する一助を担った。だが一方で、生徒の学力に関係なく、一般系高校のある学区内の高校で均等に振り分けるため、各高校における生徒の学力水準にばらつきが生じる結果となった。特に大学進学実績の良い一般系高校の生徒の間には、「授業の水準に自分の学力水準が合わない」という学力格差の拡大を招く結果となった(中村・藤田・有田編2002)。

- 6) それにより、高校側は大学進学の有利さや実績をメリットに多くの生徒を集める→中学期から受験競争が過熱化→高校時には受験シフトを組み厳格な教育指導を実施→大学への進学実績を高める、という経路をたどったとされる。
- 7) 馬居他(2005)は、韓国青少年の友人関係について次のように指摘する。①友人数は日本より少ないものの、同年齢・同クラスの友人が圧倒的に多く、友人関係の形成が教室内で閉ざされる傾向にある。②友人の会会う場所は、部活動はないため塾や習い事、近所の友人が多く、学校以外の人間関係を広げる機会が日本よりも多い傾向にある。③親友・母親・父親との関係は日本と類似しており、特に親友との会話において学校と遊びの項目の肯定度が多いが、お泊りや貸し借りをしない関係が多数派であることから、友人との距離をとることが重視されている。
- 8) 本稿が自尊感情尺度の要素として「他者関係性」を着目した理由として、平石(1990)による知見が参考となる。これまでの自己意識に関する研究動向は、自己意識と適応との関連性を分析することが主体であり、他者からの影響を考慮した発達の視点が欠落してきた。そこで平石はエリクソンのアイデンティティ論等を参照し、自己意識を研究する際には自己—他者の関連性を分析する必要があると指摘し、對他者尺度を作成した(平石の調査結果では、自己の存在の安定が他者関係の安定と結びついていることが示唆された)。本稿における「他者関係性」尺度は、平石(1990)の對他者尺度を参考に、自尊感情における自己—他者の関係性を分析する観点から作成している。
- 9) 「成績」は、上=5~下=1の5段階評価、「教育アスピレーション」は希望する教育段階を教育年数別(例:大学の場合は16年)で投入した。なお学習塾通学については、「ない」と回答した者には0、「ある」に1を与えてダミー変数を構成した。
- 10) 分析に用いる各尺度は、学校など社会化のエージェントに関与する人間関係に関わる意識項目である。「学校適応」尺度(12項目)とは、「私は学校の授業の時間が面白い」など、学習観や学校生活上のルールを尋ねた項目である。「教師関係」尺度(11項目)とは、「私は、学校の先生と

気楽に話しをする」など教師とのコミュニケーションの程度を示す項目である。「家庭生活」尺度(12項目)とは、「家族との仲がよい」など、家族とのコミュニケーションの良好さを尋ねた項目である。「友人関係」尺度(12項目)とは、「私と友人とは、よい友だち付き合いをしていると思う」など友人関係の肯定度を尋ねた項目である。「規範意識」尺度(5項目)とは、カンニングやごみのポイ捨てなど、社会的なルールや規範を尋ねた項目である。信頼性を示すクロンバックの α は、「学校適応」が.832、「教師関係」が.896、「家庭生活」が.868、「規範意識」が.707、「友人関係」が.864であり、尺度としては一定の信頼性が填補されると考えられる。

なお、「ゲーム利用時間」「ネット利用時間」については、それぞれ「テレビゲームや携帯型ゲームをする」「パソコンでインターネットをする」が質問文となっている。ゲーム利用時間にはテレビゲームだけでなく、スマートフォン・携帯型ゲーム等を含んだ操作時間、ネット利用時間はパソコンでのインターネット利用の時間である。

- 11) 韓国では、部活動は日本ほどあまり活発でないとされる。理由としては、第1に日本ではスポーツ推薦入試のように、部活動の実績が進学の際に有利に働くことがあるものの、韓国の場合は全国大会のように、部活動の実績を全国規模で競う機会が乏しいだけでなく、出場校も日本より非常に少ない。第2に本当にスポーツの実力のある子どもは、小学校時代から専門の学校に通って実力をつけるケースが多く、普通の公立中学・高校の部活動で練習する生徒との間で実力差がかなり存在していることが考えられる。

参考文献

- 新井肇・古河真紀子・浅川潔司 2009「高校生の学校生活適応感に関する学校心理学的研究」『兵庫教育大学研究紀要』34: 57-62.
- 蘭千壽 1992「セルフエスティームの形成と学校の影響」遠藤辰雄・井上祥治・蘭千春編『セルフエスティームの心理学』ナカニシヤ出版、pp.178-199.
- 有田伸 2002「教育アスピレーションとその規定構造」中村高康・藤田武志・有田伸編『学歴・選抜・学校の比較社会学』東洋館出版社、pp.53-72.
- Anderson, Eugene & Redman, George & Rogers, Charlotte, 1991 "Self-esteem for tots to teens", *Parenting & Teaching Publications, Inc.* (荒木紀幸・江里口徹人・山田礼子訳 1999『親から子へ幸せの贈りもの』玉川大学出版部)
- 趙善英・松本芳之・木村裕 2011「回想された親の養育行動が大学生の自尊感情に及ぼす影響の日韓比較」『社会心理学研究』27(1): 1-12.
- 都基鳳・野島一彦 2006「韓国における学校不適応中学生に対する学校社会事業(スクール・ソーシャルワーク)の効果に関する研究」『九州大学心理学研究』7: 21-26.
- Dreikurs, Rudolf. & Cassel, Pearl, 1972 "Discipline without tears", Harper & Row.
- 藤田武志・熊谷信司 2002「学校生活と生徒文化」中村高康・藤田武志・有田伸編『学歴・選抜・学校の比較社会学』東洋館出版社、pp.131-154.
- 藤田武志・渡辺達雄 2002「学習時間の構造」中村高康・藤田武志・有田伸編『学歴・選抜・学校の比較社会学』東洋館出版社、pp.91-112.
- 古田和久 2012「高校生の学校適応と社会文化的背景：学校の階層多様性に着目して」『教育社会学研究』90: 123-144.
- Glasser, William 1969 "School without failure", Harper & Row.
- 平石賢二 1990「青年期における自己意識の構造：自己確立感と自己拡散感からみた心理学的健康」

- 『教育心理学研究』38(3) : 320-329.
- 石川裕之 2005 「韓国の才能教育における科学高校の受験名門校化」『比較教育学研究』31 : 83-100.
- 伊藤茂樹 2002 「青年文化と学校の90年代」『教育社会学研究』70 : 89-103.
- 伊藤裕子 2001 「青年期女子の性同一性の発達：自尊感情身体満足度との関連から」『教育心理学研究』49(4) : 458-468.
- 金子真理子 2000 「教師の対生徒パースペクティブの変容と『教育』の再定義」樋田大二郎・耳塚寛明・岩木秀夫・荻谷剛彦編『高校生文化と進路形成の変容』学事出版、pp.123-148.
- 荻谷剛彦 1986 「閉ざされた将来像」『教育社会学研究』41 : 95-109.
- 2001 『階層化日本と教育危機』有信堂高文社
- 葛西真記子・長尾修一 2004 「中学生の自尊感情・規範意識と親子関係との関連性」『鳴門教育大学学校教育実践センター紀要』19 : 25-34.
- 柏木恵子 1983 『子どもの「自己」の発達』東京大学出版会.
- 金鉉哲 2007 「親・教師・友人との関係からみた韓国青少年の社会化」『第5回慶應義塾大学21COE-CCC国際シンポジウム発表原稿集』慶應義塾大学21COE-CCC、pp.347-363.
- 金美蘭 1998 「韓国における高等教育機会のメリトクラシー構造」『教育社会学研究』62 : 23-42.
- 工藤保則 2010 『中高生の社会化とネットワーク』ミネルヴァ書房.
- 熊谷信司 2008 「韓国における高校の多様化と高校生の生活」『東京大学大学院教育学研究科紀要』49 : 33-42.
- 黄京性・川田智恵子・山崎喜比古・吉田亨 1998 「韓国高校運動部選手のQuality of Lifeに関する調査研究」『学校保健研究』40 : 255-268.
- 松下良策・石津憲一郎・下田芳幸 2011 「学級適応感を支える要因の検討」『教育実践研究』5 : 61-68.
- 耳塚寛明 1980 「生徒文化の分化に関する研究」『教育社会学研究』35 : 111-122.
- 長津美代子 2001 「家族の個別化・凝集性と中学生の自尊感情」『日本家政学会誌』52(11) : 1069-1082.
- 中村高康・藤田武志・有田伸編 2002 『学歴・選抜・学校の比較社会学』東洋館出版社
- 大谷和夫・中谷素之 2013 「中学生の学業領域における自己価値の随伴性が動機づけおよび学業達成に及ぼす影響プロセス」『パーソナリティ研究』21(3) : 254-266.
- 大多和直樹 2000 「生徒文化—学校適応」樋田大二郎・耳塚寛明・岩木秀夫・荻谷剛彦編『高校生文化と進路形成の変容』学事出版、pp.185-213.
- 2008 「若者文化と学校空間」広田照幸編『若者文化をどう見るか』アドバンテージサーバー、pp.94-116.
- 佐久間路子・無藤隆 2003 「大学生における関係的自己の可変性と自尊感情との関連」『教育心理学研究』51 : 33-42.
- 戸部秀之・竹内一夫・堀田美枝子 2010 「児童生徒のテレビゲーム依存傾向および暴力的なゲーム使用と、メンタルヘルス、心理・社会的問題性との関連」『学校保健研究』52(4) : 263-272.
- 馬居政幸・李照熙・夫伯夫・関根秀行・李在鴻 2005 「韓国における日本大衆文化の調査研究(8)」『静岡大学教育学部研究報告(人文・社会科学篇)』55 : 17-48.
- UNICEF Innocenti Research Centre, 2007 "Child Poverty in Perspective: An overview of child well-being in rich countries", United Nations Children's Fund. (国立教育政策研究所国際協力部(訳))
- 2010 『先進国における子どもの幸せ』国立教育政策研究所)

- 白井茉莉・橘川真彦 2007「中学生における規範意識とそれに影響を及ぼす要因」『宇都宮大学教育学部教育実践総合センター紀要』30：165-173.
- 吉川栄子・高橋宗 2007「学級集団を形成する要因についての検討」『聖泉論叢』14：113-125.
- 財団法人日本青少年研究所編 2011『高校生的心と体の健康に関する調査』財団法人日本青少年研究所.

ENGLISH SUMMERY

Comparative research about self-esteem levels in Japanese and South Korean youths based on consciousness research with secondary school student

OZAWA Masayuki

In this article, I consider a comparative research of the social background and trends that support self-esteem levels in Japanese and South Korean students. According to the results, it turned out that both national groups scored highly for self-esteem levels. In the item of other relationships, which is concerned with their sense of fulfillment with familiar people, Japanese students were more affirmative than South Korea students. However, in the item of self-efficacy and self-evaluation, South Korean students were more affirmative. In the process of forming self-esteem, analysis showed that both national groups were influenced by socializing factors, such as their degree of adjustment to school and the quality of their family and / or teachers. Female students and students who regularly play video games for a long time tend to have a passive effect with Japanese students, while a high degree of learning time and normative consciousness tend to have a positive effect for South Korean student.

Key Words: self-esteem, self-efficacy, relationship with others, international comparative survey, consciousness about ordinary life